

人為的な生態系の攪乱状況（外来種と在来種の分布状況）

近年、鑑賞や家畜対象として輸入された種の自然界への逸出などに伴って、本来は日本に生息しない海外の生物種が侵入し、自然界へ広がっている例が数多くみられます。

このような人の活動に伴う生物の移動と再野生化により、生態的に優勢な外来種によって在来種が排除されたり、置換されたりしています。また、タイワンザルとニホンザルのように自然界では起こらない交雑によって雑種が生まれ、地域で保有されていた固有な遺伝子の喪失が懸念されています。

ここでは、人為的な生態系の攪乱状況を明らかにするために、外来種や、それらと生態的に競合する在来種の確認状況について整理しました。

【ミシシippアカミミガメと在来カメ類（クサガメ、イシガメ）の確認状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- ミシシippアカミミガメは在来のカメ類（クサガメ、イシガメ）の生息するほとんどの河川で確認

北米産のミシシippアカミミガメは、在来のクサガメやイシガメと生息環境が似ていることから競合すると考えられており、在来2種の生息に影響を与えていることが憂慮されています。そこで、これら3種の確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った27河川のうち、ミシシippアカミミガメとクサガメは北陸地方と四国地方を除く東北から九州地方にかけて、イシガメは中部地方から九州地方の河川で確認されました。ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は中国地方の旭川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。

（資料掲載：5-15～5-17、5-23 ページ）

確認河川数の比較（対象河川：27河川）

種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ミシシippアカミミガメ	4河川	9河川	11河川
クサガメ	7河川	14河川	14河川
イシガメ	11河川	7河川	8河川

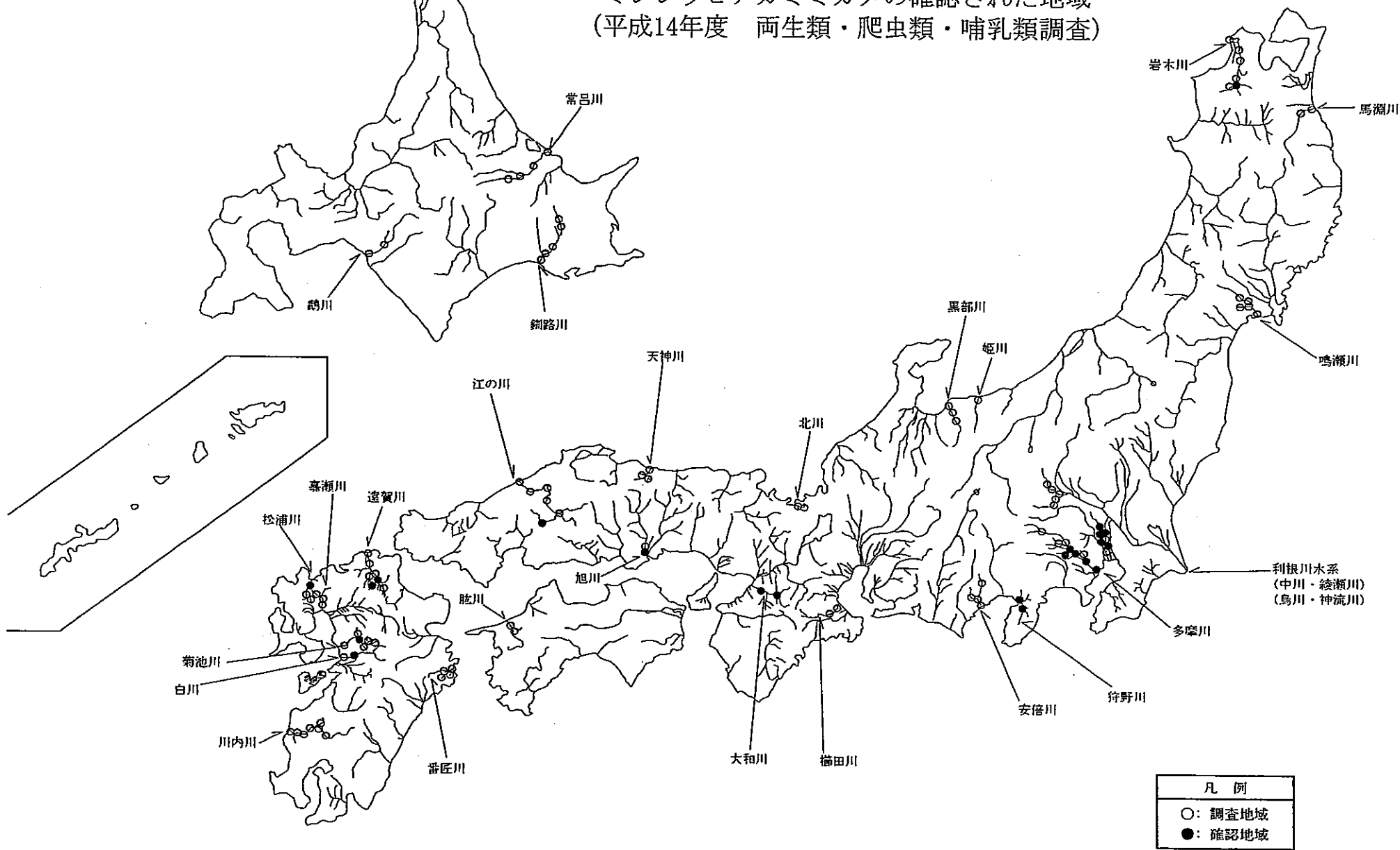
北米産のミシシippアカミミガメは、1950年代後半から、いわゆる「ミドリガメ」として販売・飼育され、1960年代後半から、野外で野生化した個体が見つかるようになりました。現在では本州、四国、九州のほかに、沖縄島や小笠原父島からも生息が確認されています。河川や池沼、水田などに広く生息することから在来種のクサガメやイシガメと生息環境が競合すると考えられ、ミシシippアカミミガメがこれら在来2種の生息に影響を与えることが憂慮されています。

クサガメは、北海道を除く平地の河川、池沼、水田などに、イシガメは、北海道を除く地域に分布し、平地よりも山間部周辺の河川や池沼および水田などに生息しています。

今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメのみが確認されている河川は中国地方の旭川のみで、その他の河川では在来のカメ類とともに確認されました。また、前々回から今回の調査結果をみると、ミシシippアカミミガメの確認河川数は増加する傾向がみられました。

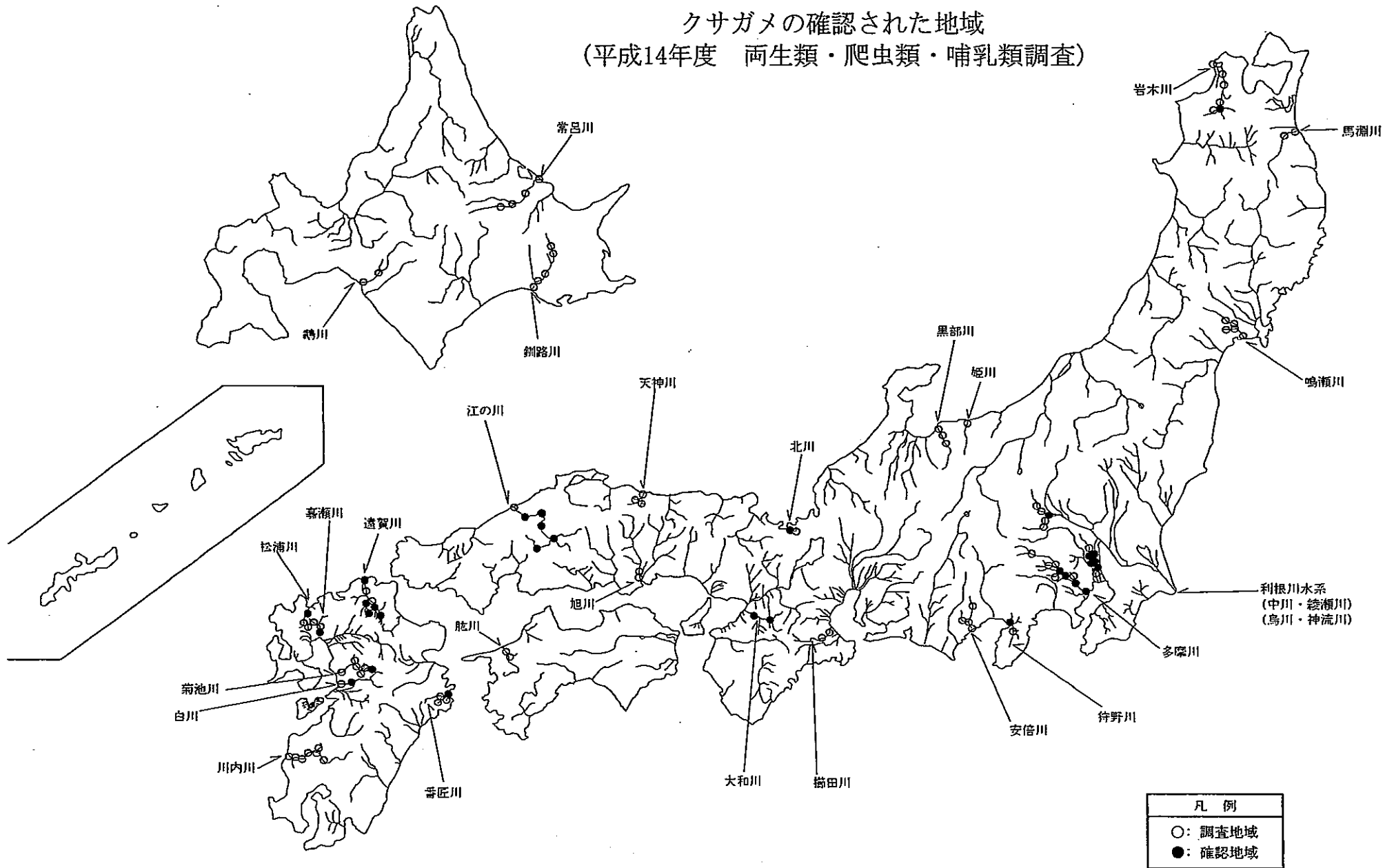
この3種が同じ調査地区で確認されている河川が多く、調査結果からはミシシッピアカミミガメによって、在来種が減少している様子うかがえませんでした。しかし、個体数レベルでは何らかの影響がみられる可能性があります。また、生息調査においてカメ類は確認するのが難しく、調査結果は必ずしも生息に関する現況を正確に表現しているとは限りません。そのため、今後もモニタリングを続け、データ数を増やすことも必要と考えられます。

ミシシippアカミミガメの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



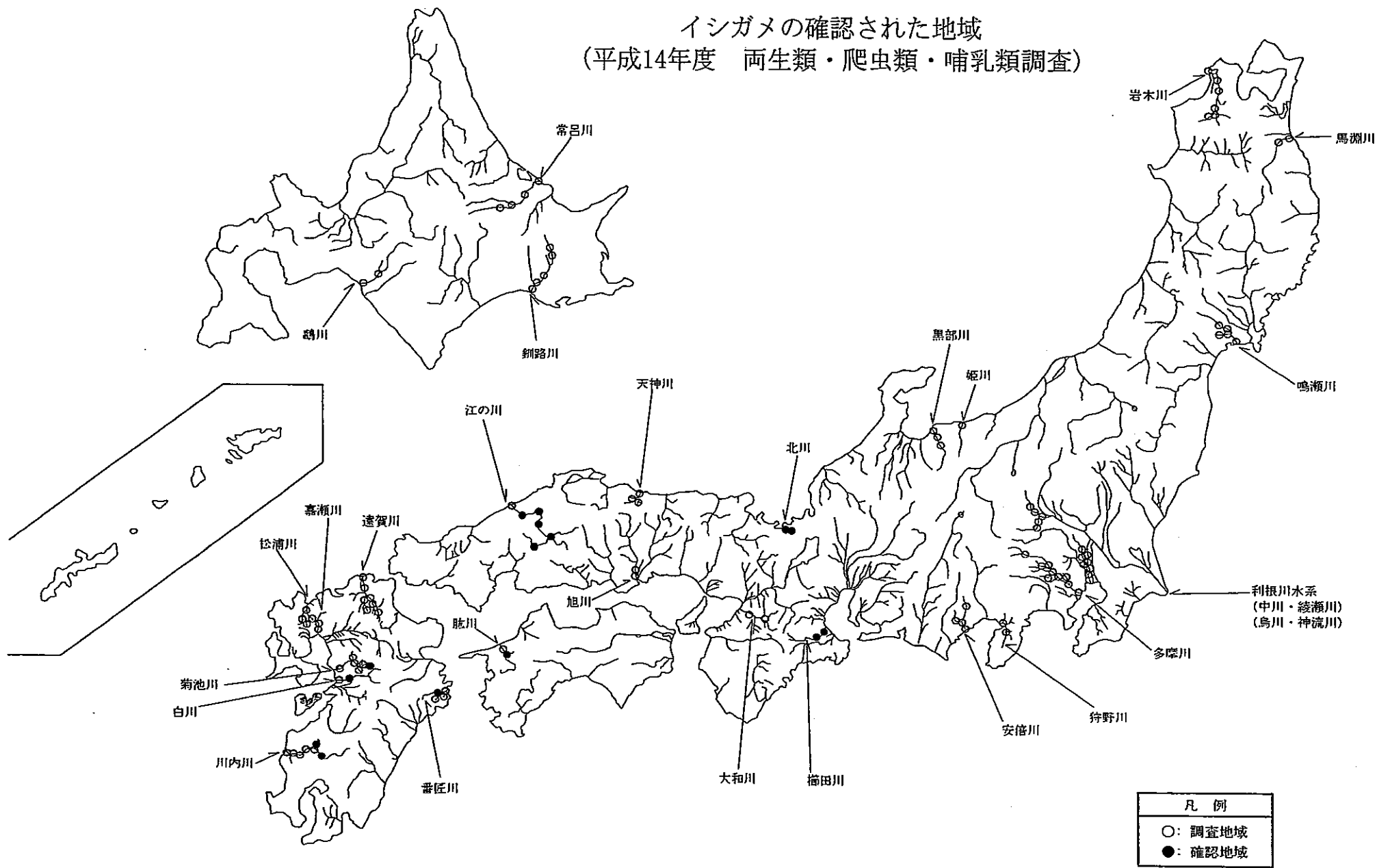
注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

クサガメの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

イシガメの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【人為的に導入された両生類（ウシガエル）の確認状況】

（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- ウシガエルは北海道地方を除く全国で確認

人為的に導入あるいは飼育されていた種の定着状況や、日本における定着状況を明らかにするために、ウシガエルの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 27 河川のうち、ウシガエルは北海道地方を除く 16 河川で確認されました。

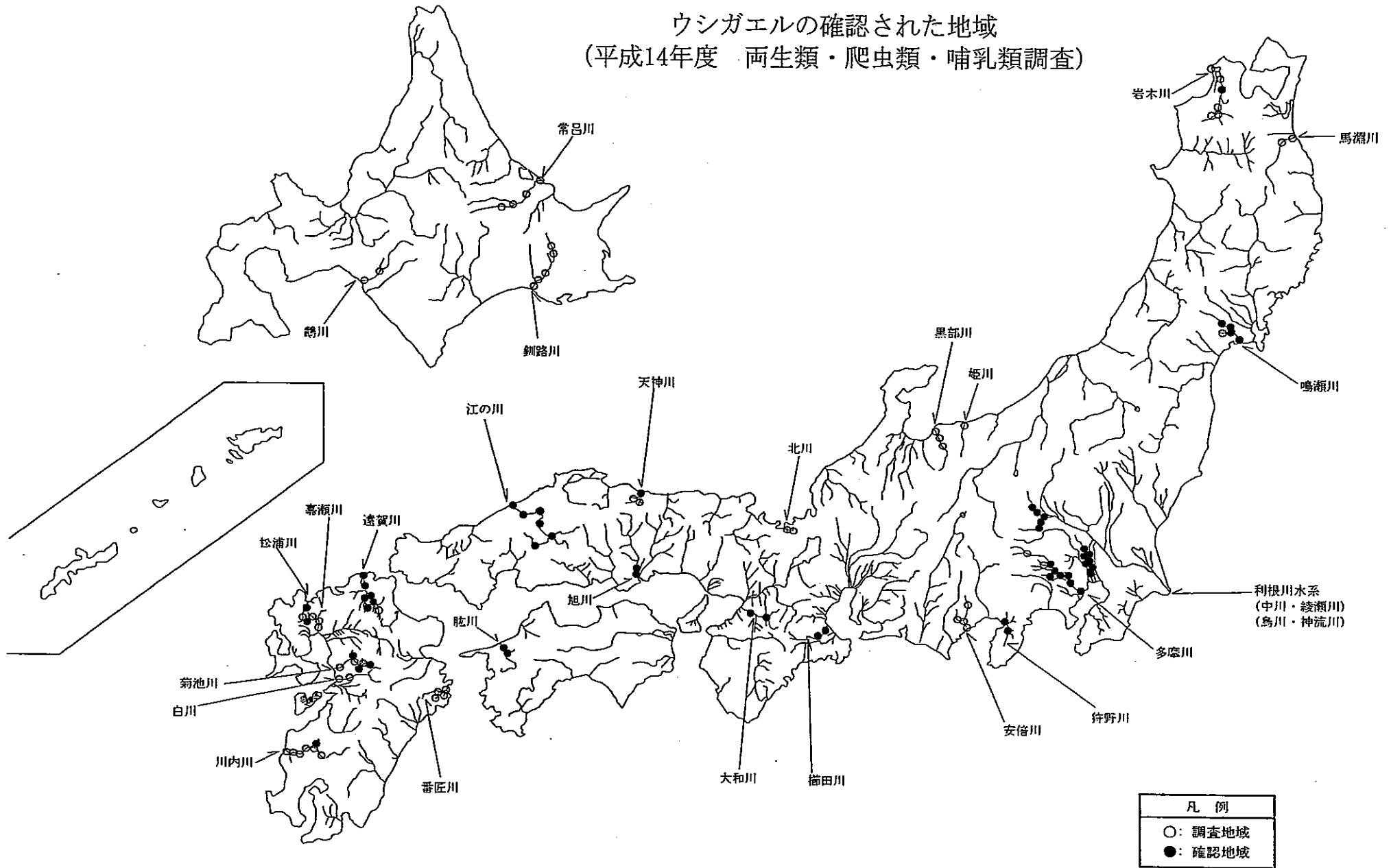
（資料掲載: 5-19、5-23 ページ）

確認河川数の比較（対象河川: 27 河川）

種類	前々回 調査	前回 調査	今回 調査
ウシガエル	18 河川	19 河川	16 河川

ウシガエルは、1918 年、ニューオーリンズから輸入されたのが最初で、食肉の輸出生産のために養殖されました。戦後の一時期に外貨を得る重要な手段となるように導入されましたが、その後、養殖が廃れ放置されました。前々回から今回の調査ともに確認河川数が多いことから、本種は各地で定着していると考えられます。

ウシガエルの確認された地域
 (平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

【人為的に導入された哺乳類（ヌートリア、ミンク）の確認状況】（両生類・爬虫類・哺乳類調査）

- ヌートリアは中国地方で、ミンクは北海道地方で確認

人為的に導入あるいは飼育されていた種の定着状況や、日本における定着状況を明らかにするために、ヌートリア、ミンクを取り上げ、これらの確認状況を整理しました。

今回とりまとめを行った 27 河川のうち、ヌートリアは、中国地方の 3 河川で確認され、そのうち 2 河川では継続して確認されています。ミンクは、北海道地方の 2 河川で確認されました。

（資料掲載：5-21～5-22、5-23 ページ）

確認河川数の比較（対象河川：27 河川）

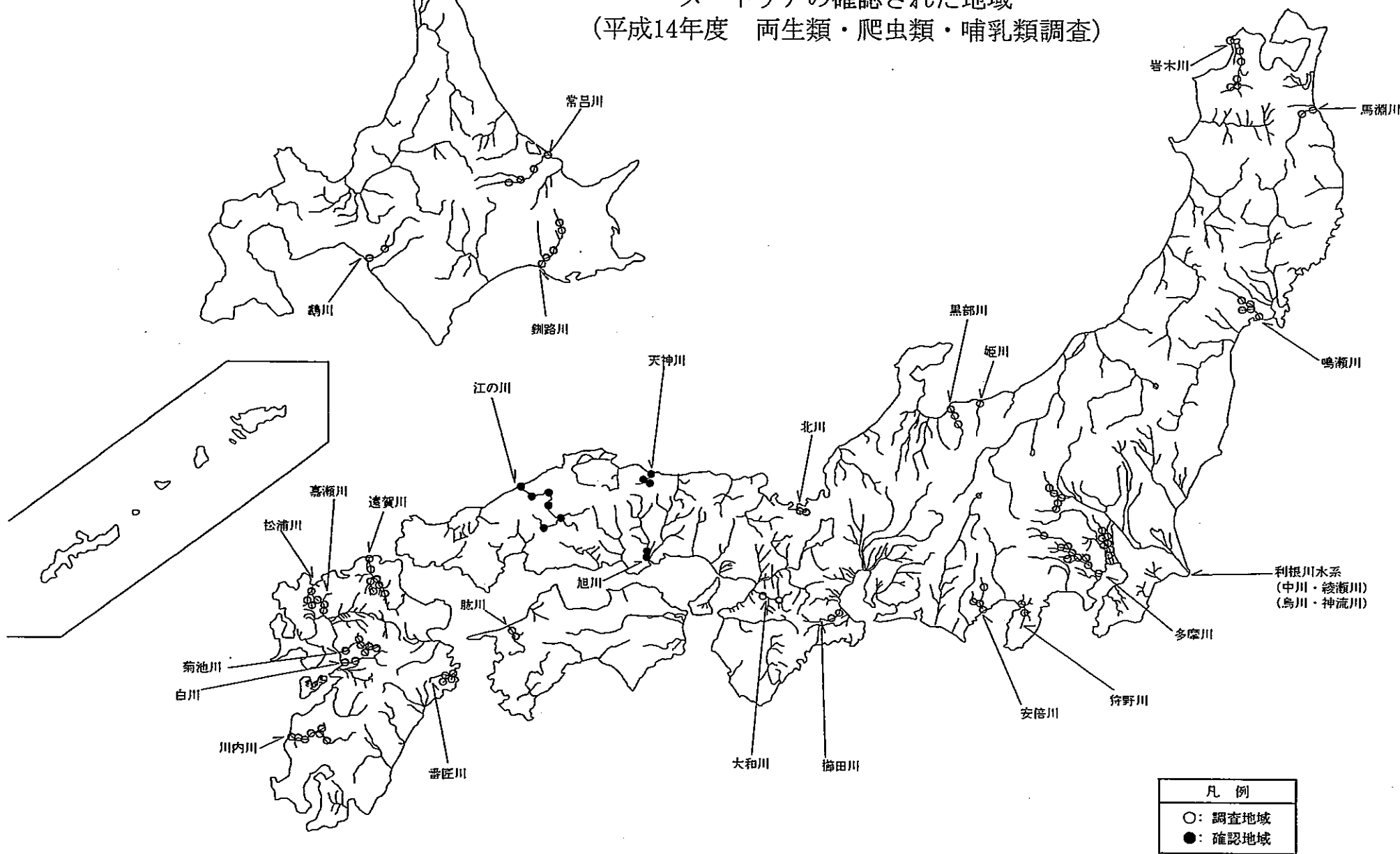
種類	前々回調査	前回調査	今回調査
ヌートリア	2 河川	4 河川	3 河川
ミンク	1 河川	0 河川	2 河川

ヌートリアは、大型のネズミ類で、1939～49 年、軍用の毛皮獣として移入され、各地で養殖されました。しかし終戦後、養殖場の閉鎖によって野外に放逐され、野生化しました。南アメリカ原産で、水辺に生活し水草などを食べます。今回の調査結果をみると、ヌートリアは中国地方の 2 河川で前々回から今回の調査で継続して確認されたことから、本種が定着している様子が伺われます。また、在来の生物群集に何らかの影響を与えている可能性もあり、今後とも引き続き生息状況を把握していく必要があります。

ミンクは、1950 年代に毛皮を取る目的で移入され、各地で養殖されるようになりましたが、飼育場の閉鎖などで逃げ出し、北海道で野生化しています。北アメリカ原産で、水辺に生活し、ネズミ類や鳥類を食べたり、河川や湖に入って甲殻類や魚類などを食べます。北海道地方の常呂川では、前々回調査および今回調査で確認されています。

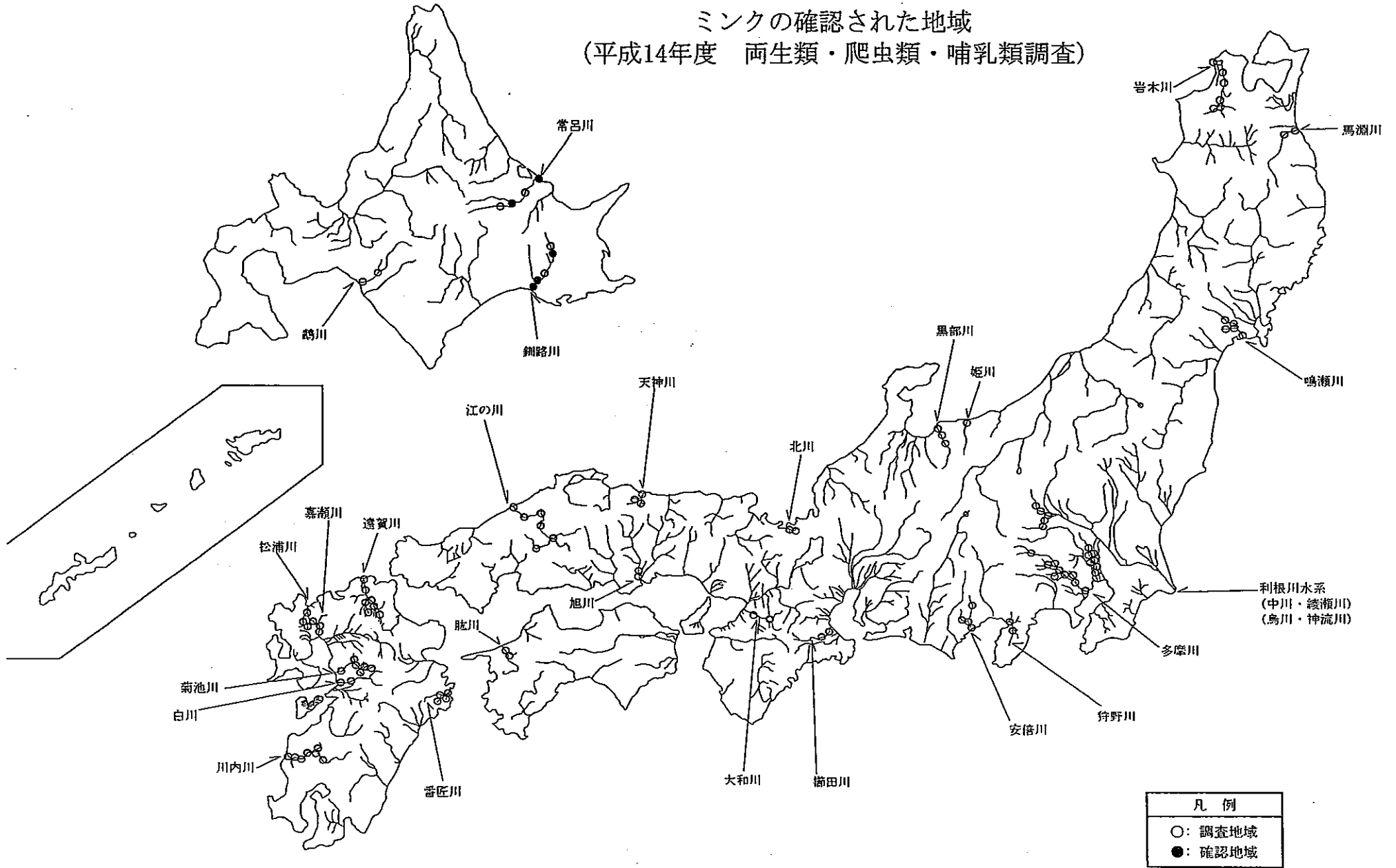
これらの種は、在来の生物群集に何らかの影響を与えている可能性があり、今後とも引き続き生息状況を把握していく必要があります。

ヌートリアの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。

ミンクの確認された地域
(平成14年度 両生類・爬虫類・哺乳類調査)



凡例	
○	調査地域
●	確認地域

注) ○印はおおよその調査地域の位置を示す。